

10 項 食を支える生協

「産直さくらこめたまご」の取り組み

廣池 孝之

京都生活協同組合 地産地消推進担当（チーフ）



京都生協は「2030 年ビジョン」に向かって取り組むこととして「組合員の普段の暮らしへの役立ち」「誰もが安心して暮らせる地域づくり」「持続可能な世界の実現に貢献」を掲げています。この方針を具体的な商品として実現しているのが「産直さくらこめたまご」です。

「産直さくらこめたまご」は京都府内の休耕田等で生産した飼料米を配合した飼料を、京都府内の養鶏場で国産鶏「さくら」に給与し生産した商品です。販売価格には 1 個 1 円の「応援金」が上乗せされ飼料米の保管配送費などに活用されています。2009 年から供給を始め、宅配では 10 個パックのみ、店舗では 6 個パックのみ販売されています。

□「産直さくらこめたまご」が開発された背景

(1)先進国で最低の食料自給率 38%

食料自給率とは日本で生活する人々が生きるために必要なカロリーをどのくらい国産でまかなえているかの指標で、食品の原料や畜産物の飼料までさかのぼって算出します。「ふだん」の生活では食糧自給率を意識することはあまりないかもしれませんが、もし「想定外」の事態が起こり外国からの輸入が滞るようなことになれば、国民の多くが食料不足に陥るリスクがあることを示しています。戦後すぐの食料自給率は 88% ありほぼ自給できていましたが、その後は一貫して下がり続け、2010 年以降は 40% 以下で推移しています。低下した理由は以下のような私たちの食生活の変化と分かちがたく結びついています。

- ①牛、豚、鶏、卵などの畜産物の消費が 1960 年から 2000 年の 40 年間で 4.2 倍に増え、畜産物だけみると自給率はわずか 16% にすぎません。油脂類の消費は 40 年間で 2.7 倍に増えました。大豆、なたね、ゴマなど植物油脂原料は 100% 近くを輸入に頼っています。
- ②パンやパスタ、ラーメン、うどんなどの消費が増え、米を食べる機会が減りました。

原料の小麦は 90% 近くを輸入に頼っています。

- ③肉や油、小麦製品を食べようになり、この 50 年間に 1 人当たりの米消費量が 120kg から 54kg へと半分以上に減少しました。

(2)日本の農業・農村の衰退

卵は 30 年以上ほとんど同じ価格で販売され「物価の優等生」と言われていますが、日本人がお米を食べなくなったので、お米はこの 20 年で 30% 以上下がっています。労働の厳しさやそれに見合う収入を得られないことから、農業の担い手や田畑の面積はどんどん減少しています。

- ①日本の農地面積は 2015 年の 450 万 ha から 2020 年には 437 万 ha に減少しました。

この 5 年間に京都府の農地面積(約 3.1 万 ha)の約 4 倍にあたる農地が消失しました。

- ②農業従事者数は 2015 年の 209 万人から 2020 年には 160 万人に減少し、5 年ごとに 2 割減少しており、その 3 人に 2 人は 65 歳以上の高齢者で平均年齢は 67 歳となっています。私たちの食は日本の人口の 2% にも満たない人々に支えられています。

(3)莫大な環境負荷をかけて食料を輸入

気候変動による食糧生産への悪影響や世界人口が 2050 年には 100 億人近くになり食料争奪が懸念される中で、日本は莫大な環境負荷をかけて食料を輸入し続けています。環境負荷の指標となるのが「フードマイレージ」(食料の重量に輸送距離をかけた数値)で、日本は 9000 億 t・km と、2 位のアメリカや韓国の 3000 億 t・km の 3 倍以上でダントツの世界一です。

海外から大量に輸入する一方で、本来食べられるのに捨てられる食品ロスは年間 600 万 t におよび、そのうち約半分は家庭から廃棄されています。

□「産直さくらこめたまご」がめざすこと

(1)食料自給率の向上

鶏の飼料に飼料米(粳米)を配合し、飼料の約 60% を占める輸入トウモロコシを国産の米に切り替えていくことを通じて、食料自給率を「ほんの少しずつ」でも高めていきます。飼料米は小麦やトウモロコシと違って今まで使っていた農機具や技術を使って生産できる米農家にとって作りやすい飼料作物です。2019 年度は京丹後市、舞鶴市、綾部市、南丹市、亀岡市、京田辺市の約 22ha の田んぼで、107 t の飼料米を生産しました。

(2)地産地消の推進

京都の水田で生産した飼料米を京都の養鶏場で鶏に給与し、生産された「産直さくらこめたまご」を京都生協組合員が利用することで、京都という地域の中で資源と資

金を循環させ、地産地消を推進します。

(3)農地と環境の保全

休耕田などで飼料米が生産され農地が活用されることで、水源の涵養、美しい農村景観の保全、環境の保全、生物多様性の保全、農村文化の継承…等々といった「農業の多面的価値」の保全に貢献します。

(4)「応援金」で農業を直接応援

「産直さくらこめたまご」は、「産直さくらたまご」より1個1円高くなっています。この1円は組合員の利用による「応援金」として積み立てられ、本来生産者が支払う飼料米の保管費や運賃等に充てられます。2019年度の応援金は約344万円となりました。飼料米の価格は食用のお米の1/10程度、国の補助金と合わせてもやっと生産に必要な経費とトントンかそれ以下です。応援金は生産者が飼料米を作り続ける「応援」の役割を確実に果たしています。

□ほんの少しでも行動を始める

組合員を対象に「産直さくらこめたまご」の取り組みについて学習会をすすめています。学習会では可能な限りグループ交流の時間を持ち、「自分に何ができるか」を考えあいます。食料や農業問題とふだんのくらしが深く結びついていることに気付き「ほんの少しでも」何か行動を始めようと、産直さくらこめたまごの購入にとどまらず、自分たちで野菜や米を作り始めた組合員もいます。

□エシカル消費が未来を変える

「エシカル消費」とは、人や社会、環境、地域に配慮したものやサービスを選んで消費することで、未来を選ぶ買い物による投票だともいえます。「産直さくらこめたまご」を毎週でなくてもいいので時々でも買うことで、食料自給率をほんの少し向上し、京都の農業、農村を応援する取り組みにつながることを組合員によびかけています。



さくらこめたまご写真



さくらこめたまご学習会